

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	村上 暁子
主 論 文 題 名： レヴィナスにおける humanisme 刷新の企て				
(内容の要旨)				
【主題の設定】 本論文は、エマニュエル・レヴィナス(1906-1995 年)が、従来のヒューマニズムの問題点を克服し、反ヒューマニズム的批判にも耐えうる新たな「人間主義」の形を追求するなかで示した humanisme de l'autre homme (他なる人間の人間主義)という発想の独自性と意義を明らかにしようとするものである。 ここで「人間主義」と訳したのは、ヒューマニズムと訳したのと同じ humanisme という単語であり、レヴィナス自身が使うのは同じ一つの単語である。しかし本論文では、これを二種に訳し分けることで、この単語に込められた多義性を表現している。これは、彼の言説において、従来のヒューマニズムを批判する際と自身の思想を規定する際とで、この単語が別の意味を持たされているとの考えによるものである。 また、これは、ヒューマニズムという使い古された語によって喚起される人文主義の伝統や、人間中心主義の発想から、レヴィナス自身が humanisme という語で表現する発想を区別するためでもある。ヒューマニズムという語は一般に、神を中心に据えた形而上学的体系のうちに人間を位置づける中世以前の発想に異を唱え、人間を中心に据えた世界観を発信するものと思われることが多い。しかしレヴィナスは、「人間」という普遍概念を中心に据えるのではなく、自他の交換不可能性や非対称性を前提とした「他者」(Autre)とのかかわりを起点に、「他人」(Autrui)の尊重を中核にもつ「人間主義」を提唱している。その意味で、彼の「人間主義」は、人間中心主義というよりも「他者中心主義」である。これは、自己と他者を同一の種の具体例や同じ類型を持つ存在者と捉える従来のヒューマニズムとは大きく異なる発想であるため、レヴィナスの発想をヒューマニズムと呼ぶ場合には誤解が生じかねない。こうした事情ゆえに、本論文ではレヴィナスの humanisme について「人間主義」という直訳を用いている。				
【研究の位置づけ】 本研究は、倫理学の伝統に対する問題提起として読まれてこそ、レヴィナス思想を貫く根本問題がより明確な姿を取って現れてくるのではないかと、との考えに基づき、倫理的観点からレヴィナスを評価するものである。 一般に、倫理学分野においては、レヴィナス思想はその独特の記述法や宗教的背景ゆえに特殊な発想と見做される傾向にあり、その「人間主義」思想についても十分に包括的な議論がなされているとは言い難い現状にある。しかしこの状況では、レヴィナスの				

主張を、倫理学という知の伝統から乖離した一種の教化的言説と見做す誤った見方が助長されかねない。本論文は、宗教思想を活用しつつ「人間主義」をめぐる考察を展開した倫理学者としてのレヴィナスの姿に光を当てることで、この問題を解決しようとするものである。

また、本研究はレヴィナス思想の多様な側面を総合的に捉えようとするものである。

レヴィナスには、「他者」という発想により現象学を発展させた哲学者としての側面と、ユダヤ教の現代的意義に注意を喚起したユダヤ思想家としての側面が指摘されることがあるが、この二側面の結びつきについては、研究者のあいだでも意見が分かれている。こうした状況下で、本論文は、どちらか一側面のみを取り上げるのではなく、「人間主義」という主題のもとに両側面がいかに結びついているのかを解明する点に特色がある。

【課題と方法論】

本論文では、特に人間の主体性に関する彼の考察のうちに、これまでのヒューマニズム思想にはない独自の発想が見いだされとの考えから、レヴィナスにおける「人間なるもの」(l'humain)の観念に着目している。この観念は、人類全体に適用される「人間」(homme)という呼称とも、人間の本質を表現する「人間性」(humanité)という用語とも異なる、人間的な生の姿をかたどった言葉である。この「人間なるもの」の観念によって表現される主体性理解の内実と、その議論の枠組みを解明することが、本論文の主たる課題である。

レヴィナスの「人間主義」に対しては、従来のヒューマニズムを復権させようとするものではないか、哲学的に厳密なものではなく、彼自身のユダヤ教信仰に基づく教化的な言説ではないか、という疑いの目が向けられることがある。しかし、彼の議論のうちには、伝統的なヒューマニズムを支えていた枠組みを根底から覆そうとする試みが見いだされる。本論文では、以下二方面からのアプローチによって、このレヴィナスにおける humanisme 刷新の企てを明らかにしている。

第一に、本論文では、初期から晩年にかけての思想の展開を踏まえつつ、過渡期の論文集として脇に置かれがちであった『他なる人間の人間主義』(1972 年)における取り組みを評価することで、人間の主体性をめぐるレヴィナスの議論が、独自の方法論によって裏打ちされていることを論証している。このアプローチは、『全体性と無限』(1961 年)以降の思索の深化の内実を解明しない限り、レヴィナス流の「人間主義」の全貌を理解することはできないとの考えにより採用されたものである。

第二に、本論文では、聖書に由来する宗教的概念を多用するレヴィナス思想と一神教の宗教的伝統の関係について考察し、彼の「人間主義」思想の根底にある倫理的思索と宗教的思索のあいだの結びつきを解明している。このアプローチは、「人間なるもの」の観念が表現する生のかたちを浮き彫りにするためには、ユダヤ教信仰に基づく思索の成果として哲学研究においては考慮の枠外に置かれがちな宗教的講話群を視野に入れる必要がある、との考えに基づくものである。

これら二つのアプローチによる研究を総合することで、本論文は、レヴィナスの「人間主義」思想を支える枠組みを解明し、この思想の射程を明らかにしている。

【研究内容】

第Ⅰ部においては、「他なる人間の人間主義」の課題と方法論を検証した。

第一章では、レヴィナスにおける「人間主義」の課題を確認したうえで、人間の内面性を軽視し人間を外的要因へと還元する反ヒューマニズムの代表格である「存在論」および「構造主義」を乗り越えるための戦略として、「意味」(sens)の概念を他人へと赴く「方位」として捉え直す彼独自の意味論を解明した。これにより、人間の唯一性を他者に対する「責任」という非対称な関係の形式に即して規定するレヴィナス流の「人間主義」が、人間それ自体に内在する意味や価値を「人格」に基づいて語る従来のヒューマニズムとは一線を画す発想であることを指摘した。

第二章では、人間をその本性や本質に基づいて定義する「自然本性主義」的なヒューマニズムを乗り越えるために、自らの「起源」に先立つものによって規定されるという特異な時間性概念を用いて従来の主体性概念を解体し、それを関係概念として新たに規定するレヴィナスの取り組みを分析した。さらに、この時間性論の内実を解明することで、主体の生の「内部性」(intériorité)を、閉じられた一箇の実体としてではなく、他者へと開かれた動態として描き出す彼の議論の独自性を浮き彫りにした。

以上第Ⅰ部では、自他の共通項に基づいて人間性を規定する発想を退け、他人が他なるものとして分離されていることがもつ「意味」について考察し、他者によって創られるという「時間性」に即して人間的主体性を規定する彼の議論が、ヒトという類の生物学的本性や人間の本質に依拠する従来のヒューマニズムの定石を覆す独自の方法論に基づいていることを示すことが出来たと考える。

第Ⅱ部では、主体性の説明に用いられる様々な宗教的概念を分析し、それらが無限者に開かれたありかたを表現していることについて考察した。

第一章では、『全体性と無限』(1961年)から『存在するとは別の仕方』(1974年)のあいだの時期に「身代わり」(substitution)概念が導入されるにあたってキルケゴールの影響があった可能性に着目して、キリスト教思想との関係を精査した。これにより、従来とは異なる仕方主体性を復権するために、遜る神との関係のうちで主体の単独性を語るキルケゴールの発想を全く別のものへと作り変え、他人たちの「身代わり」の〈自己〉として「私」を召喚する無限者とのかかわりを描き出すレヴィナスの思考の筋道を解明した。

第二章では、レヴィナスにおける「人間なるもの」の観念とリトアニア出身のラビ・ハイム「神のかたどり」という発想の連関について考察した。これにより、レヴィナスが、ユダヤ教思想を活用しつつ、自由と強制の二項対立図式を相対化する「責任／応答可能性」(responsabilité)における自由の構造を描き出し、また、無限者とのかかわりを証言する人間の思惟と言語の可能性を示していることを明らかにした。

以上二つの考察により、キリスト教やユダヤ教由来の宗教的諸概念を哲学的に吟味し、従来の神学用語とは全く別の意味を与えることで、新たな「人間主義」思想へと歩を進めるレヴィナスの議論の特徴を指摘することが出来たと考える。

第三章では、他人が被る悪の意味を問いかける「祈り」という倫理学的主題を導きの糸に、他人を助けるような倫理的行為の根底に、他者によって触発され、他者のために苦しむという「情動性」(affectivité)の形式を見出すレヴィナスの発想について考察した。これにより、レヴィナス流の「人間主義」が、心身を区別して精神のうちに人間の固有性を見出す議論とは異なり、内部と外部、能動と受動の二項対立を超えた心身の結びつき、さらにはそれに基づく自他の結びつきのうちに「人間なるもの」を見出す発想であることを明らかにした。

以上第Ⅱ部では、様々な宗教的概念を駆使して人間の主体性を語り出すレヴィナスの議論が、単なる一神教思想の焼き直しではないこと、むしろ、一箇の実体的存在者たる「私」が無限者によって他人たちへと応答する方位へと差し向けられ、自己中心的に自足するありかたを超えて「人間なるもの」へとなりゆく動向を、現象学的に分析するものであるということを示すことが出来たと考える。

第Ⅰ部、第Ⅱ部での考察を通じて、本論文は、万人を唯一者として尊重するという唯一無二の任務への選び——召命性——を起点とするレヴィナスの「他なる人間の人間主義」という発想が、従来のヒューマニズムの枠組みを転倒させるとともに、一神教の宗教思想を全く別の角度から解釈しなおす独自の発想であることを明らかにしてきた。これにより、レヴィナスが、今ここに在る「私」を起点に他者との関係に即して主体性を規定することで、自我論や人間本性論における一般的な議論の枠組みを根底から覆し、**humanisme**を刷新していることを示せたのではないかと考える。

彼が呈示した「人間なるもの」という発想は、他者との関係における主体の唯一性のかたちを示すものとして、倫理学的思索の伝統に一石を投じるものであると考える。この発想は、第一に、各人の同型性や共通性を基盤に万事に適用しうる理論を構築する伝統的なヒューマニズムに対して、自他の差異に基づく関係性（交換不可能性や非対称性）に目を向けることの重要性を示すものである。第二に、この発想は、宗教を私的領域に追いやり、世俗化されうる一般的原则に基づいて万人共通の倫理理論をうちたてる近代的な発想に対して、人間の宗教的感受性と倫理的精神性が根底において結びついている可能性を指摘するものである。それ故にレヴィナスの「人間主義」は、自己と他者が同じ人間であるという素朴な自然本性論に依拠した人権活動や、自由な市民としての個人を人間の最小単位とみなし他者の自由を侵害しないことを唯一の対他配慮の規範とする自由主義的な道徳観は、果たして真に人間的な発想なのか、という根源的な問いを投げかけるものではないかと思われる。

本論文は、倫理学の根幹にかかわるこの鋭い問題提起のうちに、彼の「人間主義」思想の現代的意義が存しているとの解釈を示したのである。

【研究の意義】

本論文は、主に以下三点において、レヴィナス思想の究明に寄与しうるものであると考える。

第一に、レヴィナスの「人間主義」が **humanisme** の方法論的刷新に基づくものであることを示すことで、彼が従来のヒューマニズムを復権させようとしているのではない

か、という誤解を取り除いた点。

第二に、レヴィナス思想とユダヤ教思想やキリスト教思想との関係を精査することで、彼の「人間主義」は哲学的に厳密なものではなく信仰に基づくものではないか、との疑念を払拭した点。

そして第三に、他者との差異という観点から人間の唯一性を規定するレヴィナスの「人間主義」が、「倫理学とはなにか」という問いを新たにつきつけるものであることを示した点である。

これにより本研究は、哲学と宗教とに二分化しがちなレヴィナス研究に風穴を開け、人間の倫理性と宗教性をともに思考する彼の議論を正当な仕方で評価するための土台を構築しえたのではないかと考える。

従来のヒューマニズムに対する疑念が噴出して反ヒューマニズム全盛期を迎えた 20 世紀が終わった後も、「人間であるとはいかなることか」という倫理的問いかけが意味を失ったわけではない。この意味で、本論文は、人間の唯一性やその倫理性、宗教性に光を当てて、人間的なありかたとしての主体性を追究するレヴィナスの独創的な試みを明らかにすることで、21 世紀における倫理学研究の更なる発展に貢献しうるものであると考える。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	☐ "KOU" ☐ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Akiko Murakami
Title of Thesis: レヴィナスにおける humanisme 刷新の企て The innovation of humanism in Levinas			
Summary of Thesis: This thesis tries to elucidate the innovation of humanism in Emmanuel Levinas. Levinas is often regarded as one of the defenders of traditional humanism. He is even suspected of being a proponent of monotheism. However, in contrast to these general assessments, his argument can be interpreted as an attempt to renew the way of thinking humanism with the intention of overcoming the anti-humanistic trends of his time. In order to discuss his idea of a "humanism of the other man" in detail, this thesis has two parts which reflect the following objectives respectively: to examine the methods he used to reform humanism and to clarify the relationship his thought had with some religions. In the first part, we pursue the analysis of Levinasian humanism. The first chapter discusses the way Levinas, with his unique semantics, overcame "ontology" and "structuralism" which he regarded as two forms of anti-humanism. Through the consideration of the structure of his semantics, we confirm that Levinas put into question the universal framework of traditional humanism by finding the unicity of being human in the asymmetric relation to the other person. The second chapter deals with the concept of "temporality" as far as being created by "the Other" is concerned — a concept which enabled him to both deconstruct the traditional notion of subjectivity and reconstruct it as a relational notion. We show how Levinas confronted "naturalism" which viewed nature and essence as the origin of human beings. These discussions highlight methodological innovations regarding humanism by Levinas. In the second part, we shed light on the connection between Levinasian humanism and the tradition of monotheistic religions by analyzing his use of religious terms. The first chapter reconstructs the line of argument Levinas employed to introduce the notion of "substitution", taking into account the influences of Kierkegaard's Christian thought. The second chapter examines a Talmudic interpretation of the "image of God" as a possible source of inspiration for his ideas such as "liberty based on responsibility" and "possibility of attesting the absolute". Through these discussions, we prove that Levinas completely recast the traditional concepts in monotheism from his own point of view. The third chapter investigates the idea of "affectivity", i.e. the possibility of suffering rooted in one's body, which he considered as the foundation for ethical actions. By noting that he defined being human as "psychism", connecting factors of body and soul, of self and others, we reveal a crucial difference between Levinasian humanism and the theories which situate humanity in rationality separated from sensibility.			

Thesis Abstract

No. 2

The main point of this thesis consists in interpreting Levinas neither just as a phenomenologist nor as a Jewish theologian, but as a thinker in Ethics who made use of both philosophical and religious thoughts for inventing a new form of humanism. With its interpretation of Levinas as an innovator of humanism, this paper hopes to contribute to further investigations into the ethical meaning of being human.